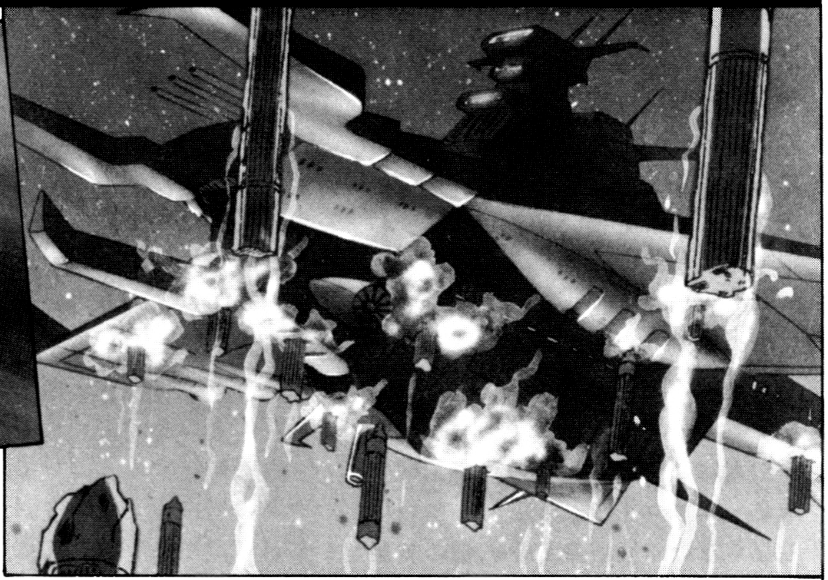
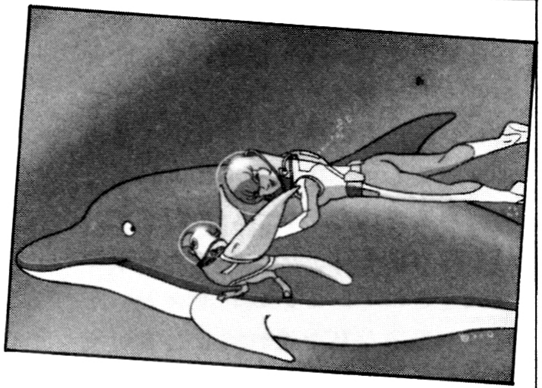
Tatsunoko 竜の子ファンクラブニュース NO.12 Dec 1980

FAN CLUB NEWS



海底大戦争

日本TVスペシャル
新春1月3日
PM４：00　放映決定!!



■ボカンシリーズ　第５弾
昭和56年２月７日（土）
PM ６：３０～
フジＴＶ系放映開始!!

ヤットデタマン

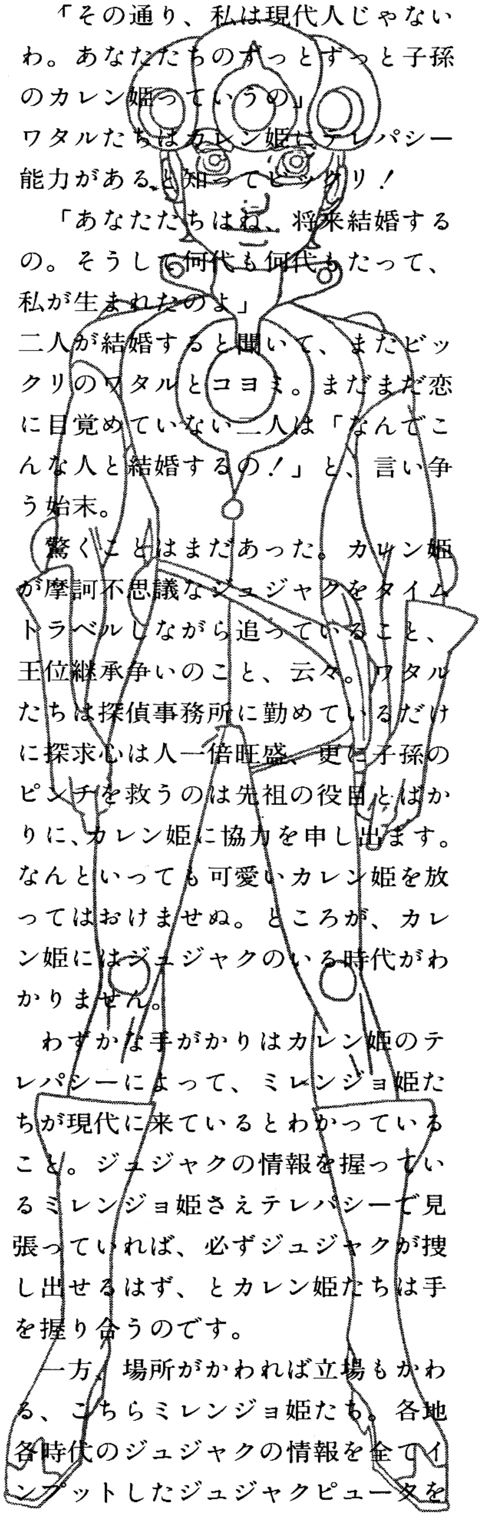
まだまだ続くよ♡　ボカンシリーズ!!　だけど今までと同じワンパターンと思っちゃいけない。タイムボカン、ヤッターマン、ゼンダマン、オタスケマン、これら４作品を乗り越えて、行くぞ強い子、ヤットデタマン!!

事の始まりはある未来国、ナンダーラ王国の王位継承争いであります。片や本命の可愛い女の子・カレン姫、片や大穴もいいところの没落王朝の末裔・コマロ王子。もともと争いにもならないくらい身分や人望の差があるのだけれど、コマロ王子の後ろには姉のミレンジョ姫がいて、彼女がどうしてもあきらめない。そこでヒレン姫はあの手この手奥の手孫の手を駆使して、王位を手に入れるため、ある方法を思いついたのです。

その方法とは、ナンダーラ王国の象徴とされているジュジャクという魔訶不思議な鳥を連れ戻した者が王位につけるというもの。ジュジャクは大古より生き続けて来た孔雀より美しい鳥。けれど、ジュジャクは気まぐれで、どこかの時代に飛び去ってしまったのです……。さあたいへん！　相手方に王位を渡してなるものか。カレン姫とミレンジョ姫はジュジャクを捜しにナンダーラ王国を飛び出すけれど……！？

場所はポンと移って、こちら現代。閑古鳥も逃げ出すほど超ひまな遠山金五郎探偵事務所。探偵助手の時ワタルと姫栗コヨミはノンビリと漫画雑誌に読みふけっております。

その時だ！　漫画どころか映画の中から抜けだしたような可愛い女の子がやって来たのです。着ている服から見てどう見ても現代人には思えません。ワタルたちがそこまで考えた時、女の子がニッコリ笑いました。



「その通り、私は現代人じゃないわ。あなたたちのずっとずっと子孫のカレン姫っていうの」
ワタルたちはカレン姫にテレパシー能力があると知ってビックリ！

「あなたたちはね、将来結婚するの。そうして何代も何代もたって、私が生まれたのよ」
二人が結婚すると聞いて、またビックリのワタルとコヨミ。まだまだ恋に目覚めていない二人は「なんでこんな人と結婚するの！」と、言い争う始末。

驚くことはまだあった。カレン姫が摩訶不思議なジュジャクをタイムトラベルしながら追っていること、王位継承争いのこと、云々。ワタルたちは探偵事務所に勤めているだけに探求心は人一倍旺盛、更に子孫のピンチを救うのは先祖の役目とばかりに、カレン姫に協力を申し出ます。なんといっても可愛いカレン姫を放ってはおけませぬ。ところが、カレン姫にはジュジャクのいる時代がわかりません。

わずかな手がかりはカレン姫のテレパシーによって、ミレンジョ姫たちが現代に来ているとわかっていること。ジュジャクの情報を握っているミレンジョ姫さえテレパシーで見張っていれば、必ずジュジャクが捜し出せるはず、とカレン姫たちは手を握り合うのです。

一方、場所がかわれば立場もかわる、こちらミレンジョ姫たち。各地各時代のジュジャクの情報を全てインプットしたジュジャクピュータを使いまくって、ある時代をピックアップ。タイム街道をラクダ型のタイムマシン・タイムラクーダでスタコラサッサといそぎ旅。

そのたびに、カレン姫のテレパシーがピカピカと輝き、先祖と子孫は手を取り合って、駕籠型のタイムマシン・タイムカーゴで追跡――まさにタイム街道膝栗毛といった趣なのです。

お楽しみアクションコーナーはどうなる？　ミレンジョ姫たちが長持ち型のタイムナガモチから部品をだして、ロボットを出現させれば、対するワタルはカレン姫の導きで眠っていた超能力を開発し、ヤットデタマンとなり颯爽と登場！！

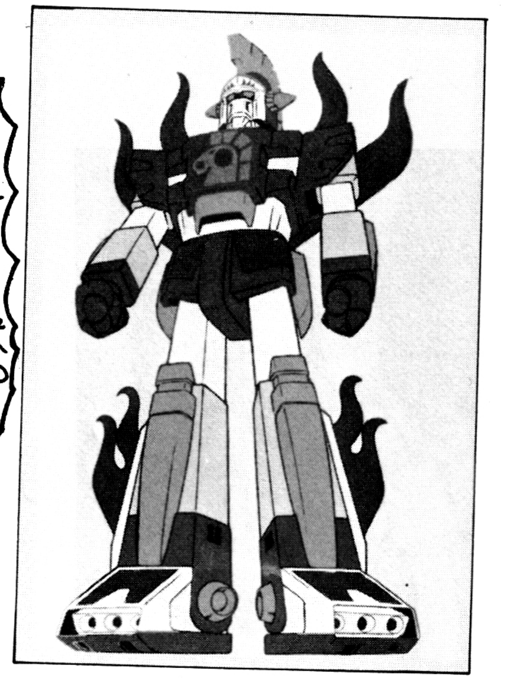
まだまだ目玉はあります。ヤットデタマンとコヨミが「驚き桃の木山椒の木ブリキに狸に洗濯機やってこいこい大巨神」と奇妙な呪文を唱え、古ぼけたいわくありげな錠前と鍵を合わせると空間のドアが開き、なんと異次元から二体のメカが飛び出すのです。さらに、二体のメカはヤットデタマンの合図で正義のスーパーロボ、大馬神となりミレンジョ姫たちを地獄へ蹴り落とすのだ。

はてさて、ジュジャクを見事に連れ戻し、ナンダーラ王国の王位につくのはカレン姫かコマロ王子か、物語の結末やいかに!?

製作／吉田健二　企画／柳川茂・宮田知行　総監督／笹川ひろし　チーフディレクター／大貫信夫　シリーズ構成／小山高男　キャラクターデザイン／天野嘉孝　メカデザイン／大河原邦男　美術監督／岡田和夫　主題歌作詞・作曲／山本正之

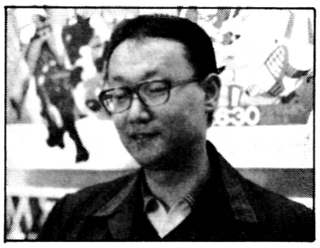
ミレンジョ姫・スカドン・コケマツ

世紀の対決!?
ジュジャクをめぐって現代・未来



大巨神

前作のボカンシリーズとはここがちがう



■シリーズ構成
小山高男

物語の設定に関して、今回は５年間積み上げてきたＶＳＯＰ（ベリースペシャルワンパターン）からの脱却をはかりました。

まず見た目で違うところといえば、キャラクターデザインの改訂ですね。特に悪玉が大幅に変りました。今まで小原さんがアテていた女ボス役（今回はミレンジョ姫）はあまり変っていませんが、セコビッチ変じてコケマツは鼻に面影が残っているだけ、ドワルスキー変じてスカドンは全く違っています。それに彼らのしゃべり口調にしてもミレンジョ姫はお姫様言葉に、スカドンは関西弁から片言の英語まじりに、コケマツもオカマ言葉の「僕ちゃん、なんとかなのよん」から、「小生は──」と変っています。

物さがしについても工夫をこらしました。今までダイナモンド、ドクロストン、命のもと、と第１弾から第３弾まで宝さがしをしてきましたね。でも毎回手がかりをもとに捜しにいったものの、その物は結局間違いであったというのがパターンでした。「またか……」とか、「どうせまた違うのよ」という印象が強かったと思います。そこで今回は必ず一話ごとに捜し物（ジュジャクという謎の鳥）と出会うことにしました。ジュジャクピューターがジュジャクのいる時代の情報を提供するのですが、これには一際間違いはありません。行けば必ずいるんです。ところがジュジャクには変身能力があるので、ローレライの妖精になったり、野豚になったり姿を変えて出没し、なかなか捕まえられません。そのため毎回今度こそ自分たちの手に入れようと争奪戦がよりフィーバーしてくると思うんです。その変の変り方が大きいですね。全般のイメージとしては第５弾にして、これが第１弾となるような、新ボカンシリーズ第１弾となるようなつもりで、作品全体に色々な工夫をしているわけです。

メカについても従来の動物メカから、二枚目の巨大ロボット、大巨神をはじめ、大天馬、大馬神といった名のスーパーロボが出てきます。ギャグタッチの作品の中にあって、かなり異質な感じがするのではと心配されてる方がいらっしゃるかもしれませんが、ロボットが出てくるといってもメカプロレスをさせるわけではありません。ある程度ゲームっぽい要素を加えて、今までのボカンシリーズの雰囲気はそのまま楽しめるように工夫をしています。この辺は笹川総監督の独壇場、演出の見せどころですね。

更に決定的に違うところがあります。それは善側のキャラクターです。ヤッターマン以後、主人公の男の子と女の子が二人でヒーローに変身していましたが、今回は男の子（時ワタル）だけがヤットデタマンになります。またこれまで私生活のときの善玉の二人が悪玉に比べて個性があまり出てませんでしたね。いい子いい子した感じだけで魅力に乏しかったと思うんです。そこでヤットデタマンでは二人の性格づけをはっきりさせました。ポリマーの武士とテルちゃんのように色づけして、二人の個性を出してみることにしました。新コンビのワタルと姫栗コヨミもやっぱり女性上位なんですよ。コヨミはいつも弱虫弱虫とバカにしているワタルがヤットデタマンに変身しているのを知らないものだから、ヤットデタマンにほれちゃうんです。「私、ワタルとは結婚したくないけれど、ヤットデタマンとなら結婚してもいいわ」と思うわけ。同一人物でありながら見比べちゃう、そういうコヨミの心理も描いていきたいですね。ヤッターマン以来、ゼンダマンもオタスケマンも、内容的にはタイトルとは逆に悪玉が善玉を食ってきましたが、ヤットデタマンでは善側の面白味もぐんと表に出していきたいですね。

とにかくヤットデタマンでは、これまでの４作品の長所、短所を検討してマンネリのサビおとしをすると共に、偉大なるマンネリを生かしつつ、このシリーズのファンの皆さんに、新装開店とも思える作品を作っていこうとスタッフで話し合っています。どうぞ今後ともヤットデタマンに絶大なるご声援をお願いします。

姫栗コヨミ・時ワタル

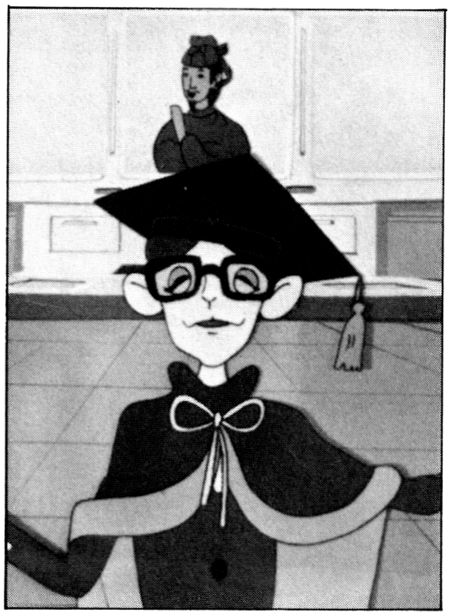
カレン姫・コマロ王子

タイムボカンシリーズ
タイムパトロール隊

オタスケマン

キャラクター研究
ゲキガスキー vs トミー教官

彼らってちょっと不思議な存在。いったいどういう発想から生まれてきたんだろう？　次作、ヤットデタマンの見どころも含めて、スタッフにその辺を聞いてみた。



■演出　大貫信夫

ボカンシリーズでは三悪が最大の魅力なんですが、でもこう３作も続くとギャグにしてもマンネリになってきて、新鮮味がなくなってしまうんですよね。そこで一人毛色のかわったのを出そうか——というのが、ゲキガスキー誕生のきっかけです。

新キャラを作る上で考えたのが、セコビッチとドワルスキーとのかねあいです。同じように三枚目を出してもぶつかりあうだけで演技も死んでしまいますからね、逆に美男子(ハンサム)でスマートな要領のいい、何をやらしてもバツグンな人間を出そうと、キャラクター設定をしたんです。

声の面では、最初美男子なキャラということで、山本正之さんはあわないんじゃないかと（正之さん御免なさい）いう意見もあったんですが、そのアンバランスさが、かえっていい感じになりましたよね。ゲキガスキーの三悪とは違うムード、神秘性、クールさの上に山本さんの声が重なって、はじめて魅力あるキャラになったんじゃないでしょうか。

次作ヤットデタマンでは、善側をもっと堀り出したいと思ってます。それとメカも人間型をしてますから、今までとは一味も二味も違うメカ戦を創りだしたいですね。

■ゲキガスキー　山本正之

ゲキガスキーのキャラクターを見せられた時、これはやばい！　と思いましたね。前にゼンダライオンをアテたんですが、あれはメカで三枚目だったから自分自身にたぶってやりやすかったけれど(笑)、ゲキガスキーはさすがにためらいました。でも憧れの二枚目を逃す手はない(笑)キャラとしても面白いし、可能性をためすためにもと、挑戦したんです。

苦労するのは、プロじゃないから声優さんたちに音量で負けちゃうこと。声を出そうとするとどうしてもトーンが高くなっちゃうんです。でもその方が若々しくていいんじゃないかと。小原さんたちとはボカンの頃からのつきあいで気心が知れてるから、セリフについて話し合ったりするんですが、演出の方から本番前に本に目を通すなと言われまして。つくった声より地の声がほしかったらしいんですね。だからいつもぶっつけ本番で練習はしません。これでいいのかなとは思うんだけど(笑)

今、新番組のテーマを作ってるところです。これまでの主題歌とは全く別方向にもっていこうと思ってます。テーマをモチーフにした曲も増やしたいし、テクノポップ調にしてみようとか、色々と考案中です。

■総監督　笹川ひろし

ゼンダマンに出てくるトミーヤマのモデルが、富山敬さんというのは周知ですが、最初声優さんをキャラクターとしてＴＶ画面に出していいものかどうか悩みました。前例がありませんし、一等富山さんの反応が心配でしたから。ところがのってくれましてね、これはいけると、今度はおまけ教室でトミー教官として、出したんですよ。トミーヤマに手を加え、手足を長くし、ロボットではなく人間として登場というか(笑)

富山さんの似顔絵からキャラクターができたのは、グズラでお父さんの声をアテてた頃からの顔見知りでしたからね。机の上でイメージをふくらませているうちにできたんですよ。富山さんはすごく絵になる顔をしてるでしょう。ちっとも嫌味じゃないし、眼鏡にも特長があって非常にマンガチックなんです。描いてみてわかった(笑)　トミー教官は富山さんの人柄と声が相まって、親しみやすい雰囲気になり、アニメキャラとして成功したと思います。

さて、注目のブタですが、次作にも出ます。「ノウアルブタは鼻を隠す」と言いながら、アラビア風に顔を隠して出てくるんですよ(笑)　詳しくは、見てのお楽しみ——！！

★オタスケマンの最大の関心事は、トンマノマントの正体と、アターシャの心の人。皆さん、もう誰か察しがついてるかな？　わかった方は、どちらか一つでもけっこうですから、答えと理由を書いてＦＣまで送って下さいませ！　正解の中からオタスケマンのセルとシナリオを10名様に差し上げます。〆切りは来年1月7日（消印有効）です。発表は発送をもってかえさせていただきます。

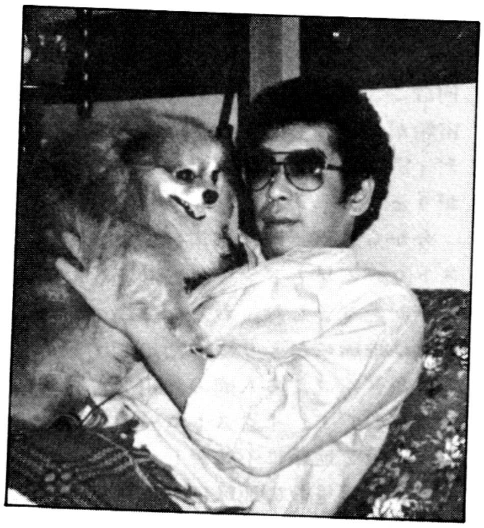
いよいよ大詰め、闘士ゴーディアン ダイゴたちは、果してアノー号で地球を脱出し、ビックカタストロフから逃れられるだろうか！？

闘士ゴーディアン

■日曜　AM7：30～
12ch 放映中！

天衣無縫の快男児、ダイゴはメカ豹クリントを従え、ゴーディアンとなりマドクターに挑む。だがそこにたちふさがるのは、イクストロン、プロジェクトXという人類救出計画、太陽のすかし、そして移民船アノー号と謎につつまれたものばかりだった。

この荒野に潜んでいたアノー号はこれからどうなるのか？　人類は宇宙から飛来したソコネス星とその惑星ウカペがもたらすビックカタストロフ、氷河期から逃れることができるのだろうか。このゴーディアンのシリーズの流れ、これからの見どころについて、シリーズ構成、山本優氏に聞いてみました。



▲東京・武蔵野の自宅にて、愛犬・Mrラッキーとたわむれる、山本優氏

山本　このゴーディアンは大別して四部の構成からできています。当初は今年12月いっぱいまでの予定で三部構成でしたが、来年２月まで予定が延びましたので、新たに四部めを加えました。

第一部は『運命の始動編』ともいうべきもので、何も知らずにヴィクトールタウン（以下Vタウン）へメカコン隊員となるためにやって来たダイゴが、彼の知らないところで仕組まれていた運命に、知らず知らずに巻き込まれていく過程を描いています。

荒野の中にサントーレという砦があり、そこでダイゴは姉のさおり、肉体は死してもコンピューターという形で現われる父・大滝京太郎博士、そして彼の造った闘士ゴーディアンと出会います。また、父を殺したというガンマン、トロス・クルスとの対決。その中で色々なものを学び、運命のからくりにとまどい成長していくダイゴ。これからのゴーディアンの世界がどのように展開していくのか、様々な謎を提起し、ダイゴのおかれている状況や彼の人間性を追求するのがこの章の中心です。

第二部は『戦闘編』　ここでメカコンとマドクターの闘いが、一層激しさを増してきます。マドクターをむかえ打つためゴーディアンは出動しますが、ついにはメカコンの本拠地、Vタウンが占拠されてしまうのです。そしてメカコンをはじめVタウンの人々はサントーレへ逃げのびます。この章で、前章『運命の始動編』で提起されたいくつかの謎が、Vタウン戦争の際にイクストロンという生きた鉱物が発見されることによって、しだいに明されてきます。何故マドクターは執拗にVタウンを攻撃してきたのか──。それはこのイクストロンが欲しかったからなのです。マドクターがこれほどに欲しが

るイクストロンとは！？これこそがプロジェクトＸの原動力、太陽のすかしの謎解きの要なのです。

プロジェクトＸとは人類救出計画のこと。かつて宇宙の彼方から突如地球をかすめて押し寄せた燃える巨星ソコネスと、そと惑星ウカペがもたらした天変地異が、地球に大異変（第１次カタストロフ）をもたらしました。大滝京太郎博士は一度ならずこの大異変が五万年周期で再び地球を襲ってくると想定し、プロジェクトＸを作り出したのです。いずれまた地球に大異変、ビックカタストロフがおこる。その大異変は以前の規模とは比べものにならず、今度こそ地球は滅びてしまうだろうと。今、地球は滅亡という絶対危機に直面しているのだ。

プロジェクトＸにはイクストロンが必要。サントーレ側もマドクター側も皆助かりたい。双方一歩もひけぬままサントーレとＶタウンの闘いの中で、人間同士がからみ、自分なりの立場で闘っていく人々がそこにいます。

第三部は『奔流編』　更にプロジェクトＸが突きつめられ、物語はクライマックスへと進んでいきます。ここで浮き彫りにされるのがダイゴの幼馴染のオカモトリョウマ。オカモトリョウマは世界中を旅していたため経験豊富で知識が広く、サントーレの軍師として活躍します。そして一人でも多くの人を助けるため、人々にサントーレに向かうよう呼びかけます。また一方ではジェロニモ16世というインディアンが現れ、彼はインディアンの神話にあった太陽のすかしを追ってるうちにサントーレにたどりつきます。彼は太陽のすかしを追っていけば、大異変から人々を救えると信じていたのです。そして太陽のすかしをサントーレの頂に発見することによって、はじめてイクストロン、プロジェクトＸ、太陽のすかしが結びつくのです。太陽のすかしがイクストロンのありかをさしていたのなら、更に追っていけばプロジェクトＸの全貌がわかるに違いない。ジェロニモは更に謎を追っていきます。

太陽のすかしとは超自然現象のようなもので、岩が光ったりして物の方向を指し示します。そしてついにジェロニモ16世は、荒野の中から宇宙船、アノー号を探しあてるのです。しかし、何故ここにアノー号という近代的な宇宙船があるのでしょう。ここからゴーディアンの世界は、一挙に宇宙へと拡がります。

今から五万年前、宇宙の彼方、イクストローム星とドクマ星で壮絶な星間戦争がありました。お互いに傷ついた人々は地球にたどりついたのですが、これがダイゴたち人間の先祖と毒魔大帝統なのです。イクストローム星人はアノー号で地球に不時着した時、すでに再び五万年後に地球はウカペ星によって大異変がおこることを予想していました。イクストローム星人は子孫を救うため、イクストロンとアノー号のありかを太陽のすかしによって発見できるよう、仕組んでおいたのでした。

アノー号を発見することによって、五万年前のイクストローム星とドクマ星の星間戦争を再現するがごとく、アノー号の奪取戦が始まります。食うか食われるか、アノー号を手にいれさえすれば、ウカペ星が太陽熱を遮断し氷河期になる前に、他の星へ移民できるのです。ダイゴたちは、補助エンジンなどを使いアノー号をサントーレに移そうとしますが、その前にマドクターの基地であるＶタウンを突破しなければなりません。そこでオカモトリョウマが動き出し、マドクターの情勢を探り、マドクター側の人間を味方につけ、マドクターラインを突破しようとするのですが殺されてしまいます。かなり壮絶な死に方をし、それだからこそダイゴたちはオカモトリョウマのためにもアノー号を手にいれようと、サントーレに向かいます。そしてついにはイクストロンをアノー号にひきこむまでにいたり、すぐにでも動かせる状態になります。けれどもマドクターも一歩もひかず、一大決戦にもつれこむのです。ここまでが『奔流編』で、12月いっぱいの予定でゴーディアンのテーマを暗示的に終わらすつもりだったんですが、２月まで延びましたので……。

第四部は『新生編』とし、最終の73話まで進行します。今度は宇宙に飛び出していくのですが、この宇宙を舞台にする時に、今までにあったＳＦアニメのような展開をするのではなく、ゴーディアンなりのちょっと一味違ったものにしたいなと思っています。その辺はどうなるかは来年のお楽しみということで——。

——お話が宇宙へというと、新しい星でのダイゴたちの生活が見られるかもしれませんね。次に部分的なことについてお聞きしたいのですが、ゴーディアンは従来のロボット物、ＳＦ物と比べるとかなり異色ですが、この点について。

山本　普通のロボット物、ＳＦ物というのは、設定としてだいたい博士がいて、研究所があって、敵のメカ獣が攻めてきて、ヒーローが出動していくという感じですよね。僕はそれをうちやぶりたかった。だからこそダイゴというキャラクターが生まれたのだし、作風にしても都会的雰囲気じゃなく西部劇風タッチ、マカロニ・ウェスタン調にしてみました。荒野の中で生きている人間たちのドラマだから、そこは都会の人間とは違う伸びやかな生き様を描いてみたかった。あれを街の中を舞台にしていたら、単なるロボット物になったでしょうね。

また舞台があちらこちらにいかない

で一つの場所、サントーレとLタウン周辺で闘ってましたから、生活感、人間臭さを出せましたよね。

——登場人物にはダイゴをはじめゲストキャラにしても魅力的な人物が多いですね。

山本 ゴーディアンで一つやりたかったのは、一度出てきたゲストキャラというのはその場限りで消えてしまうことが多いでしょ。もったいないというか、つまらない気がしましたので、一度出したゲストキャラを一話、二話で死なせたりするんじゃなくて、なるべくメインでつかってみようと。ゲストであっても、全体のストーリィからすればメインキャラにも匹敵するようなね。そこでとくに九里一平氏にお願いしてつくってもらったのが、オカモトリョウマとジェロニモ16世、レッドノーズです。彼らが出てくることによってゴーディアンの世界は拡がり、ついにはプロジェクトXの解明までにつながります。

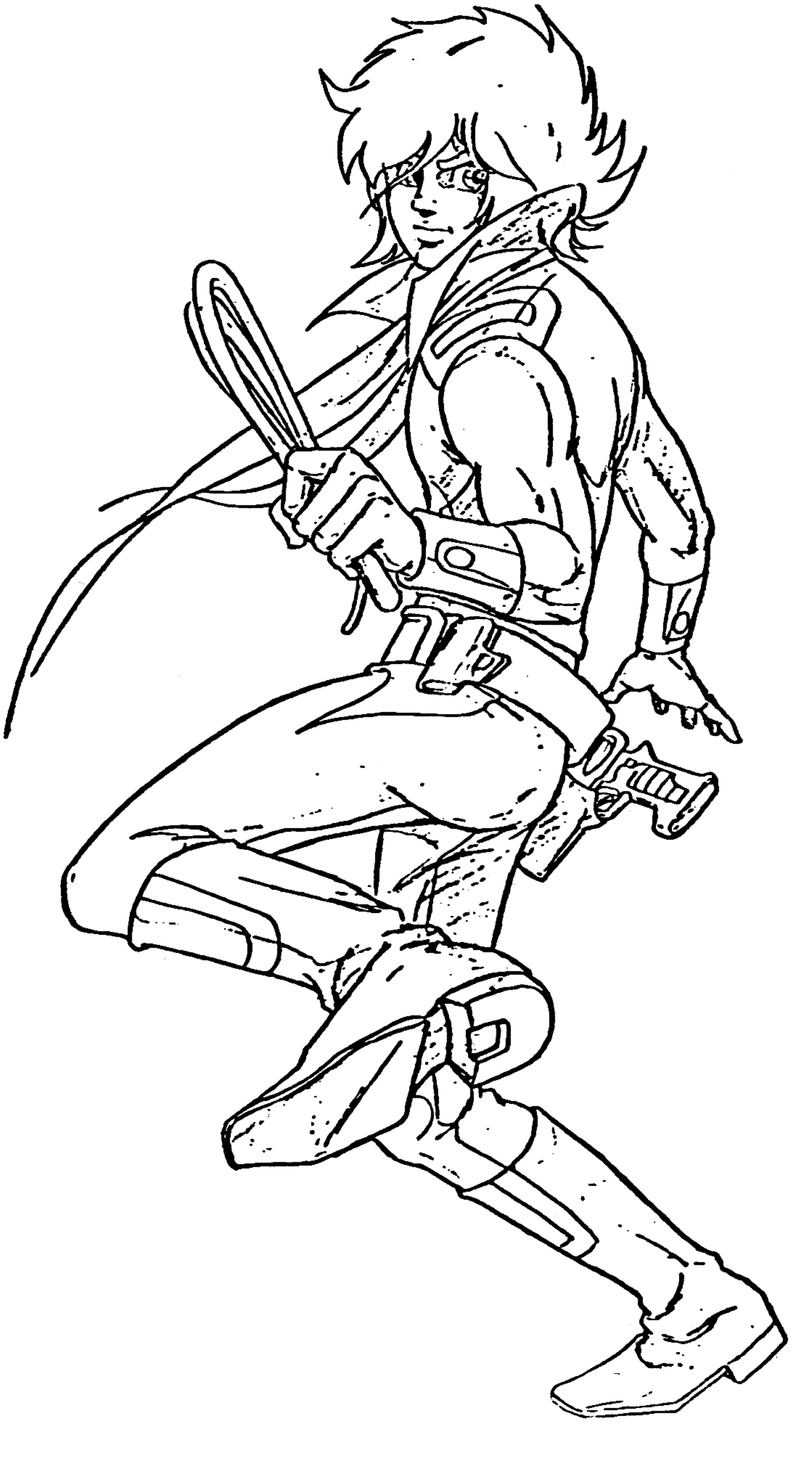
ダイゴについては従来の竜の子ヒーロー、ガッチャマンやキャシヤーンの路線から違うものを出してみたかった。竜の子カラーにそまりきらない、真面目でキリッとしたヒーローではなくて、何か新しいスターが生まれてもいいんじゃないかと、まったく別のヒーロー像を描いてみたいと思ってました。あの荒野にふさわしい、多少とぼけてて、何かあると熱血漢振りを見せるけれど、必ず勝つとは限らない。人間的な温か味があってドジもするという、そういう幅をもったキャラクターが欲しかったのね。それだからこそゴーディアンの世界にとけこんでいたし。これが健やキャシャーンタイプだったらちょっとできなかった作品でしょう。

——日曜の早朝という時間帯は、TV漫画としてはむつかしいところが多かったんじゃないですか。

山本 放映前、そのことについて不安はありました。たいていの番組は夕方6時から7時台、早くても5時台だったでしょう。新作アニメとしては早朝番組はありませんでしたから、実験的、挑戦的意味が多々ありましたね。ところがフタを開けてみると以外と視聴率が上がり、中・高生ファンもついてくれて、これはいけるんじゃないかと。時間が早いからといって（そのために子供たちの視聴者が増える）質はおとしていません。ガッチャマンファンが見れるものをと心がけていましたら。それにしてもむつかしすぎるという意見もありましたが……(笑) なかには見そこねる人もいると思いましたので、ときどきその後の話で回想シーンをいれたり、ナレーションでカバーしました。

——これまでにボカンシリーズやガッチャマンII、Fとシナリオを書かれてきましたが、それらと比べてはどうですか？

山本 シリーズ構成をまかされていますので、やりがいがありますね。かなりのって書いてます。自分の世界をどんどん出せるというか。今までゴーディアンのように大河風に流れていくアニメ作品ってそれほどなかったでしょう。ガッチャマンの場合も大きな流れはあるけれども、一つ一つのお話というのはあまり関連性がなかったし。ゴーディアンでは様々な人物や謎がグルグルまわりながら盛り上がっていくという気分が出せたから、大河物としては一つの試みを果たせたんじゃないかな。この辺がうまく定着してくれれば、もっと別な角度で、もう一つ大河物を創ってみたいですね。進行中の竜の子企画も色々あるので、また新しいものに挑戦してみたいですね。



とんでも戦士ムテキング

何故、こんなに破茶目茶で面白いの？　ムテキングのヘルメットの下は？
今、原監督に明してもらおう!!

――突然の質問ではありますが、トンデル作品、ムテキングのポイント、面白味はどこにおかれてますか。

原　とにかくこの作品は色々なものが盛りこまれているんです。クロダコだけでもお話ができる、遊木家だけでもお話ができる、ムテキングだけでもお話ができる、モンスターだけでもお話ができるというように、１本の作品に何本もの作品がはいってます。一本の作品全体で楽しめるのももちろんだけれど、トンデル時代といわれる今、シーン、シーンで楽しめるものをと目指してるんですよ。アクションも見られるし、タコたちのバカバカしさも見られる、それがこの作品の魅力じゃないかな。創る側としては、これが苦労のタネというか……。バラエティショーなだけに飽きる間もなく次から次へと色々なものを出していかなければならない。同じカットでも背景やBGMを変えていくとかね。そのためには情報集めをしなければなりません。ニュースや雑誌、映画を観て、これはナウイ、面白いというものがあったら画面にしていく。でもこれは一人ではできません。スタッフみんながのらないとね。その点ムテキング班は若いスタッフばかりで、発想が新鮮、僕なんかえっと思うことに視点がいくんですよ。作品全体としては、アメリカ西海岸をベースに、原宿、新宿あたりの感覚がありますね。

――モンスターたちが正体を現わしはじめましたが、これから先、クロダコたちとどうかかわってくるんでしょうか。

原　ウランケン、ミーガ男、トラキュラとか出てきましたが、クロダコたちはモンスター館の下にロケットを隠してあるし、一番いいすみかだし、そこをぬけ出すと地球征服ができなくなってしまうから、なんとか彼らの調子よさで一方的に握手して、依然、いついちゃうんですよ。モンスターにしてみれば変な奴らをなんとかしなければと思うけれど、なんか誤魔化されて、いつのまにか二つの生活が始まってしまう。モンスターもけっして悪者ではないから、みんな人のいい連中だと、クロダコたちも悪いことをしているけれど、みんな人のいいタコだというふうに扱ってますから、それとなくお互い住みついたという感じなんです。だけどこれから先はどうなるかわかりません。モンスターたちがこんなうるさい館には住めないと家出していくかもしれないし(笑)

――チビダコはふだんも宝箱の中にいるんですか。

原　箱の中にいます。今週はどんな作戦をやるんだろうと興味を示して、クロダコたちをのぞいてるんですよ。いままでそういうシーンがあまりなかったけれど、今度一緒にブヒヒと笑ったりするところも出てきます。チビダコはある意味からいけば、クロダコの奴隷ですよね。やれーとやらしてしまう。でもそこで彼らにいんうつに作戦をさせるとあまりに可哀相ですから、チビダコはチビダコで楽しみながら作戦を決行していくという雰囲気にしてます。マジに鉄砲やミサイルを射つのではなくて、オモチャ的なメカに乗って雨を降らしたりとか、可愛く見せてるんです。

――クロダコたちはタコ星から来たわけですが、地球では何を食べてるんですか。

原　食べるシーンは今までなかった

○カット　チビダコドラキュラ

んだけれど、あまり気持ちの悪いものは食べさせられないよね。タコの姿をしているけれど、人間と同じように考え行動しているわけだから、やっぱり食べものも同じようなものを食べさせないとね。タコローが遊木家で食事するように、これが地球人の食べるカレーライスというものか、とか言いながら、食べることもあると思うんですよ。

——魚市場のシーンの時に、いかはありましたが、何故かタコはなかったんですよ。これは意識したんですか。

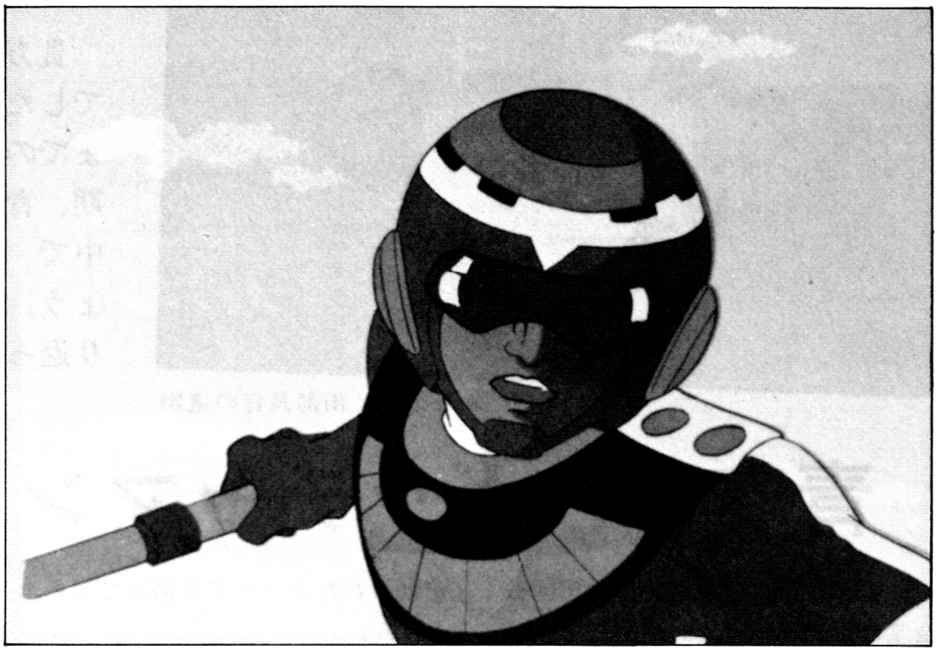
原 いや、別に意識したわけじゃないんだけれど(笑)タコの共食いはしないでしょうね。これからのギャグネタで出てくるんですが、タコローに対して「あいつをやっつけなければどうしようもないべ。酢ダコにでもしてやる」とタコサクが言うと、他のクロダコどもがギャーと部屋の隅に隠れる。そしてタコキチが「お前よくそんな残酷なことがいえるな」(笑)と言ってみたりとかね。タコヤキとか、タコさしには拒否反応を示しますよ。

——竜の子爆発は特徴がありますが、今回は花火を使ってるんですね。

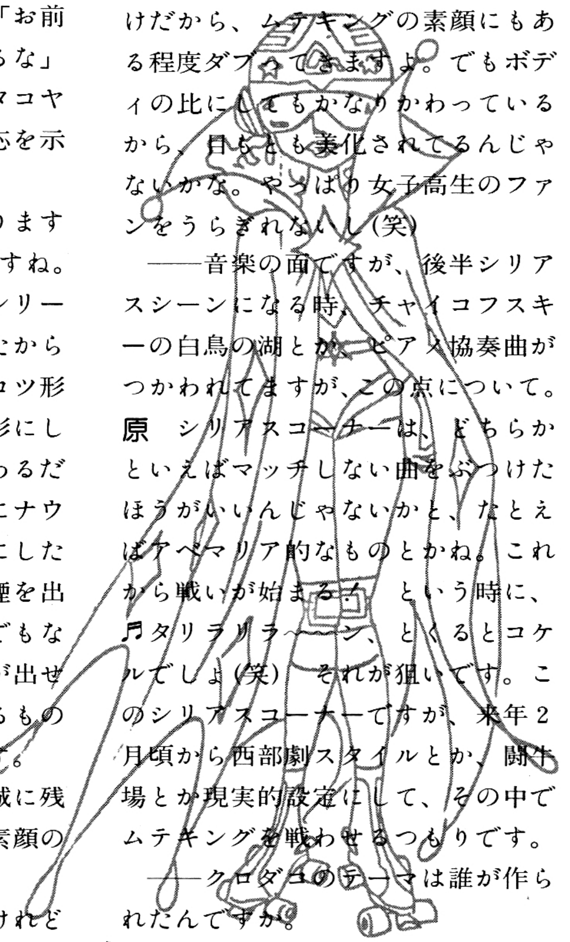
原 花火にしたのは、ボカンシリーズとは違うものをと、意識したからなんですよ。ボカンではガイコツ形の爆発でしょ。だからタコの形にしても何の形にしても目先が変わるだけにすぎないから、何かほかにナウッポイものがないかと、花火にしたんですよ。なにも爆発だから煙を出さなきゃいけないということでもないわけだし、花火なら派手さが出せますからね。またこれにかわるものがあれば、とりいれていきます。

——ヘルメットに隠れてて誠に残念なのですが、ムテキングの素顔の設定はあるんですか。

原 今のところありません。けれど人気の度合いとか、ファンの要望が多ければ、いずれムテキングの素顔が出るかもしれません。登場人物で



一番興味をもつのはタコミでしょう。タコミが「ムテキング様はきっとこんな方よ」と空想で美形を描けば、タコサクが「いやきっとこんなだべ」ととんでもない顔が出てきたりしてね(笑) 実際にはリンがやってるわけだから、ムテキングの素顔にもある程度ダブってきますよ。でもボディの比にしてもかなりかわっているから、目もとも美化されてるんじゃないかな。やっぱり女子高生のファンをうらぎれないし(笑)



——音楽の面ですが、後半シリアスシーンになる時、チャイコフスキーの白鳥の湖とか、ピアノ協奏曲がつかわれてますが、この点について。

原 シリアスコーナーは、どちらかといえばマッチしない曲をぶつけたほうがいいんじゃないかと、たとえばアベマリア的なものとかね。これから戦いが始まる！ という時に、♫タリラリラ〜〜ン、とくるとコケルでしょ(笑) それが狙いです。このシリアスコーナーですが、来年2月頃から西部劇スタイルとか、闘牛場とか現実的設定にして、その中でムテキングを戦わせるつもりです。

——クロダコのテーマは誰が作られたんですか。

原 あの歌は僕が作ったんですよ。どこかで聞きたことがあるような—そのイメージを文芸の柳川氏と相談して、誰でも唄える歌詞にしたんです。調子いい歌でしょ。僕たちスタッフも気がつくと唄ってる(笑) この後モンスターロックやクロダコのテーマパートIIも考えてます。

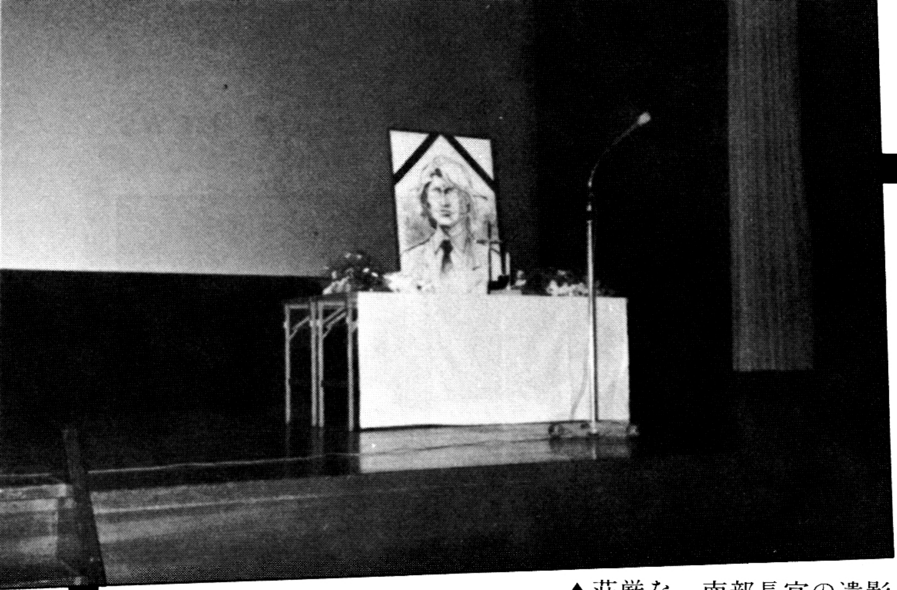
——救援メカ・トガゲッテルは役立つのですか。

原 トカゲッテルは実際にはあまり役立ちません。舌が長くドリルにもなるし、強い尻尾とやる気は充分あるんだけれど、どっかぬけてる。どちらかというと、僕の本当の強さを見せてやるとクロダコのゴム獣メカにつっこんで、逆に騒ぎを大きくしちゃうんですよ。その騒ぎに乗じてリンがムテキングに変身しますが、気分的に盛り上るという感じですね。

——最後にこれからの見どころについてお聞きしたいのですが。

原 ムテキングの登場シーンで主題歌をパロってみたり、沢田研二や田原俊彦のような歌い方をするとか、色々と考えています。またアクションシーンで今はゴム獣メカとムテキングが戦ってますが、これから直接クロダコブラザーズと戦わせます。といってもタコの姿のままではなく、スーパーマンになったりとか、怪物になったりとかね。でもそうなってもコテンパンにやられることには、変りがないんですよ(笑)

○カット ムテクィーン



▲荘厳な、南部長官の遺影

貴方にとってガッチャマンって、何でしたか？　旧作からファイター終了までの約８年間、貴方はどういう思春期、青春時代を過ごしましたか。その中で、ガッチャマンに何を感じたでしょう。今、ひとときでいいんです。振り返ってみませんか。

青春は、ガッチャマンと共に——

去る10月10日、東京・千代田区公会堂で、ガッチャマンフェスティバルNo.３、南部長官告別式を行いました。当日は、喪服に準じた服装にて、北海道や九州などの遠方の方も含め、約700名の方々が御参列下さいました。東京は曇り空、詩的に言えば天さえ泣きそうなその日でした。

大平透氏、小隅黎氏も参列下さり、またザックプロモーションをはじめ、全国ガッチャマン系ファンクラブからの献花、スタッフや声優の方々に南部長官、ガッチャマン終了への御言葉を賜わりました。誌上にて恐縮ですが、遅ればせながらここに告別式がとどこおりなく行われましたことをお伝えすると共に、厚く御礼申し上げます。

このたび敢えて南部長官告別式と銘うちましたが、私たちにはもっともっと忘れてはならない人がいます。レッドインパルス、ベルク・カッツェ、アラン神父、ホーク・ゲッツ、キャシー、パンドラ博士、アンダーソン長官、ゲル・サドラ、エゴボスラー伯爵、なんとたくさんの人生がそこにあり、めぐりめぐって一つのドラマをつくりあげていたことでしょう。私たちは、彼らの安らかな永眠を祈らずにいられません。

南部長官の死……、ガッチャマンシリーズの終了は私たちの青春に、一つの大きなピリオドを記しました。ガッチャマンによって、一つの世代が創られたというても過言ではありません。

けれど、このジ・エンドは全ての終りではありません。これからの出発点なのです。宇宙の悪魔と科学忍者隊の闘いは終わりましたが、私たちの青春は、またこれから始まるのです。学業、スポーツ、仕事、そこにはブーメランや羽根手裏剣といった目に見える武器は何一つありませんが、私たちは、私たちの闘いにせいいっぱい挑んで行きます。ガッチャマンの向こう側にあるスタートラインに立つためには、ただ、想いがあればいい——。

以下、このガッチャマンと長き時間を共にした、大平透氏、小隅黎、宮本貞雄作画監督、そして皆さんからの声を掲載いたしました。

■南部博士、安らかに……

大平　透

南部長官告別式の朝、私は不思議な事件？　に遭遇した。いつもの様に居間で一服して、ソロソロ出かけるかと灰皿に手を伸ばし吸がらを捨てて腰を上げようとした時、ツーンと痛みが走り、そのままソファーに崩れ落ちてしまったのである。タタリじゃア！？　南部長官の祟りか？　はたまたアンダーソンの祟りか？

とにもかくにも千代田公会堂へヤットの想いで辿りつき、ステージに上って多勢の皆さんの前で追悼の辞を述べたのだが、マイクの前に立った瞬間、腰の痛みはすっかり忘れてしまったのだから、これは南部の祟りではなかった様だ。

『南部長官、いや私は貴方を南部博士と呼ぶ方が好きです。本当に永い間貴方とはおつきあいさせて頂きました。一言で申せば博士は孤高の人でした。それは地球人類の平和と共存という巨大なテーマに取組んだ時から始まったといえます。博士も人の子、私的生活はミステリアスなヴェールに覆われようとも、アットホームなひとときがあったはずなのです。しかし悲しいことに地球を狙う魔の手に立ち向かうためには、その大切なひとときも犠牲にしなければなりませんでした。

可愛い５人の戦士たちにあえて数字のニックネームをつけたのも、ともすれば人情に走りがちな博士の心へのブレーキとも申せましょう。常にこの５人の子供たちを死と隣り合せの戦場へ送らねばならなかった博士の心の痛みは、私にはよくわかっておりました。

すべての戦闘から解放され、親子の様な交わりの中で生活したいと何度思ったかわかりません。しかしそのたびに、それを経験したら、命がけの使命に立ち向かわせる時、より大きな苦しみを味わわねばならぬ、

1秒を争う指令が一瞬でも遅れ、地球人類に危機を招きかねない！　最期に自ら敵地へ乗り込むまで、博士貴方は一言もおっしゃいませんでした。しかし私だけはその心中、手にとる様にわかっておりました。子供たちに気取(けど)られぬ様、その博士の心を、言葉のはしばしに私は表現して参ったつもりです。

悠久(ゆうきゅう)の世界へ旅立たれた南部博士を慕う、多くのファンになり代りまして、お別れの言葉を申し上げます。心安らかに……、そして、ガッチャマンは不滅です。ゴッドフェニックス、不死鳥を造られた博士の心を心として、闘い抜くことでしょう。いつまでもいつまでも見守ってやって下さい。』　祈禱

御報告……その後、10日程でギックリ腰は快方に向かい、毎日仕事に励んでいます。南部長官最期の言葉を再現いたしました折の、会場の皆さんの美しい涙は、博士への何よりの手向(たむ)けでした。心から御礼申し上げます。

■アメリカ大会で見たことなど

小隅　黎

こんにちは。

「ＳＦ考証」という、不思議な役割を務めている小隅黎(こずみれい)です。

といっても、シナリオに文句をつける「考証」よりは、むしろ番組が始まる時の設定や、終わる時のしめくくりかたなどのアイデア提供のほうで、スタッフの方々には喜んでいただいているみたいですが……。

でも今日は、そういう仕事の話はぬきにして、この夏アメリカのボストンで開かれた世界ＳＦ大会へ行った時のことをご報告しましょう。(私の本格的な参加レポートは、雑誌、「ＳＦ宝石」の80年12月号に載っていますので、ＳＦファンの方は、是非そちらも読んで下さい。)

ファンクラブニューズNo. 11に、8月の「サンディエゴ・コミック・コンベンション」のことが出ていましたが、あそこに紹介されていたアメリカの竜の子ファンクラブ代表のフレッド・パッテン(Flederick Patten)という人は、12年来の、私の友人です。(会ったのが12年前で、文通を始めたのはそれより２年くらい前のことになります。)この人とその親友のロビン・ライデン氏が協力して、日本のアニメをアメリカでも放映しようというキャンペーンを張っている……といっても、アメリカのＴＶ会社に買わせようというだけではなく、アクションの多い日本のＳＦアニメは、幼児向きにきめられたアメリカのＴＶコード（アニメに対する）にひっかかってしまうので、まずその規則から改正させようという運動なのです。(サンデー・フランク社が規則に合うよう直したアメリカ版『ガッチャマン』―― Battle of Planets より、彼らは竜の子が製作した原版『ガッチャマン』を見たがっているのです。)

▲D50097　ミック

そこでこのフレッド・パッテン氏は、ＳＦ大会々場のホテルにある小会議室２つを使い、大会期間の５日間連続で、各国のアニメの放映を続けていました。そのうち半分以上は日本製でした。少しでも彼を応援する意味で、私も、タツノコプロのご好意でダビングさせていただいた劇場版ガッチャマンのテープを持っていきました。その上映の時、私はあいにく他のプログラムのために手が放せず、見に行けなかったのですが、翌朝、ホテルの廊下で行き会ったパッテン氏が、目を輝かせて伝えてくれました。「すごい！　ガッチャマンを映した時は、部屋がぎっしりの大入り満員だったよ。あれを早くアメリカでも公開したいね。いいものを持って来てくれてありがとう！」と。

その日の夜、べつの友人のルーム・パーティに招(よ)ばれて廊下を歩いていると、途中で立ち話をしていた３、４人の青年（もちろんアメリカ人、でしょう）が、いきなり「ガッチャマン」と言うのです。びっくりして振り向いたのですが、こっちには気がつかず、さかんに仲間と「ガッチャマン」のことを話し合っていただけのことらしい。急いでいたため、声をかけて話にまじる時間のなかったことが残念でした。

フレッド・パッテン氏のグループは、毎土曜の夜、ロサンゼルスで、テレビから録画したアニメ・テープの上映会を開いています。常連は30人くらいだそうで、その中には90マ

イルも離れたところ（東京―静岡間くらいの距離）から、ほとんど欠かさず車をとばして見に来る会員もいるとのことです。こうした少数のファンの間に、日本製テレビ・アニメの魅力は、すでにしっかりと定着し、浸透しているわけです。

もう一人の、ロビン・ライデン氏は、今年の春、日本へ来ました。私と一緒にタツノコプロを訪問したのが４月８日（火曜日)。その前後に、他のプロダクションも見て来ているのですが、感想を尋ねると、「どこのスタジオもみんな礼儀正しくて親切だったが、タツノコはその上にとてもフレンドリー（好意的）だった」と、大喜びをしていました。

こういう熱心な人たちの手で、アメリカのＴＶ界に、日本製のアニメが氾濫するのも、もう遠いことではないかもしれません。そして、今の自動車さわぎみたいに、大統領が、（この原稿が出る時にはもうカーターかレーガンにきまっているはずですが）「日本製アニメの輸入制限！」なんて言い出す日がやって来るかも……。

■ガッチャマン制作の想い出

宮本貞雄

旧作ガッチャマンの制作を開始する際、竜夫社長よりオリジナルキャラクターデザインを見せられ、かなり悩みました。アニメの上で今までこのようにシリアスなキャラクターはありませんでしたし、また、ボディアクションをさせる、動かさなければならないのですから、その辺りの苦労は察していただけると思います。とにかく、何から何まで新しい作法を考える必要がありました。風防の処理、マントの扱い方、飛ぶ、走る！　ギャラクター隊員との格闘上でのアクションの特長づけ、殴られた時に体が壁にのめりこむ、顔が歪む、カラーの円をちらすというのはこの時に考えたのですが、アニメならではできる効果、デフォルメ、デザインと工夫をこらしました。

一番苦労したのは、このキャラクターたちを動かすアニメーターの選択です。各キャラクターの描き分け等むつかしいので、先方から敬遠されることもしばしばでした。社内アニメーターにしても教育しなおす必要がありました。アニメーターは今まで色々な形で誰かに教えられたり、あるいは独学をしたりで描き方に癖がついてしまっています。これをガッチャマンを描く方向に直さなければなりません。朝となく、夜となく、僕なりの教え方で、それこそ口やかましく教育しました。皆、陰で、あいつは鬼のような人だとか言っていたのではないでしょうか。でも、一本の作品を完成させていくには、そのぐらいのことは当然だと思います。

僕のモットーは“素人には甘く、プロには厳しい”こと。プロならばいいかげんな仕事は許されません。将来、僕たちにかわってアニメ界を背負っていく彼らだからこそ、その土台をしっかり積んでほしいし、期待せずにはいられません。

作画監督としてアニメーターを養成する＝＝よりよい画面を作り出すことができる。でも、実際はなかなかそうはいきません。やはり何人、何十人もの人が描くのですから、原画にしても本来のキャラクターとズレが生じます。これを一枚、一枚手をいれていくには、根気と体力を要します。毎日、70カットほど（１話は約300～400カット）流していきました。

僕の23年のアニメ歴の中で、ガッチャマンほど一本の作品に永く付き合ったものはありません。旧作の終了後、４年ほど他社の作品を作りましたが、パートIIのお話があって竜の子にカムバックした時も、不思議なことにガッチャマンを忘れることなくスムーズに仕事に入れました。何故竜の子にカムバックしたのかと言えば、竜夫社長の遺したガッチャマンをもう一度手がけたかったからです。生前、竜夫社長と制作についてあれこれ談議したこと、トレス台の上で鉛筆を走らせたことなどが、綾子夫人の姿にダブって、恩返しをしなければ（大げさかもしれませんが）と沸々とわきおこってくる気持ちがありました。本当に吉田竜夫、綾子夫人にはよくしてもらいましたから――。また、竜の子の運命のかかったこのガッチャマンIIという作品に、どうしても断わる言葉が僕にはありませんでした。かっこよく言えば、誰かが言ったセリフではないけれど「僕がやらねば誰がやる！」という心持ちでした。

けれど、パートIIはけっして快調にはスタートしませんでした。旧作の頃のスタッフが必ずしも全員揃っていたわけではありませんでしたか

ら、ガッチャマンを知らない新しい人たちに、また大変な作品を作り上げていくため、一から教育しながらの作品作りの日々が続いたのです。アニメーター不足が相まって、案の↙

▲堺市　田中正行

↘定、一ヶ月も経たずにピンチがきました。ＴＶの放映は毎週一本ずつですが、我々が作るのは１本だけで３～４ヶ月かかるのですから当然のことです。その絵の遅れのため、大平さんをはじめ声優の方にも随分迷惑をおかけしました。申し訳なく思います。

ガッチャマンにアニメーターが集まらない理由、それは一重にむつかしすぎるからです。「ガッチャマンは作る作品ではなく、見る作品だよあんな大変なもん、誰がやるの？」とよく言われたものです。けれどむつかしいからといって避けていてはよい作品もできあがりません。20数分間、見てるだけのほうがどんなに楽でしょう。それを敢えてガッチャマンに突き進み、ハードスケジュールに追われ、動画とセルとタイムシートにまみれた日々を送ったたくさんのスタッフたちよ——、この場をかりてお礼申し上げます。そして最後まで応援して下さったファンの方方、ありがとうございました。この８年間の苦労を無駄にせず、また新しい作品にいかしていきます。何かの機会にガッチャマンに再会するその日まで、どうぞ健たちを忘れないで下さい。

▲豊中市　西ちはる

■創造物

空は健
風はジョー
流れる雲はジュン
緑の山河は甚平
青い海は竜
——そしてそれを統べたまうは神

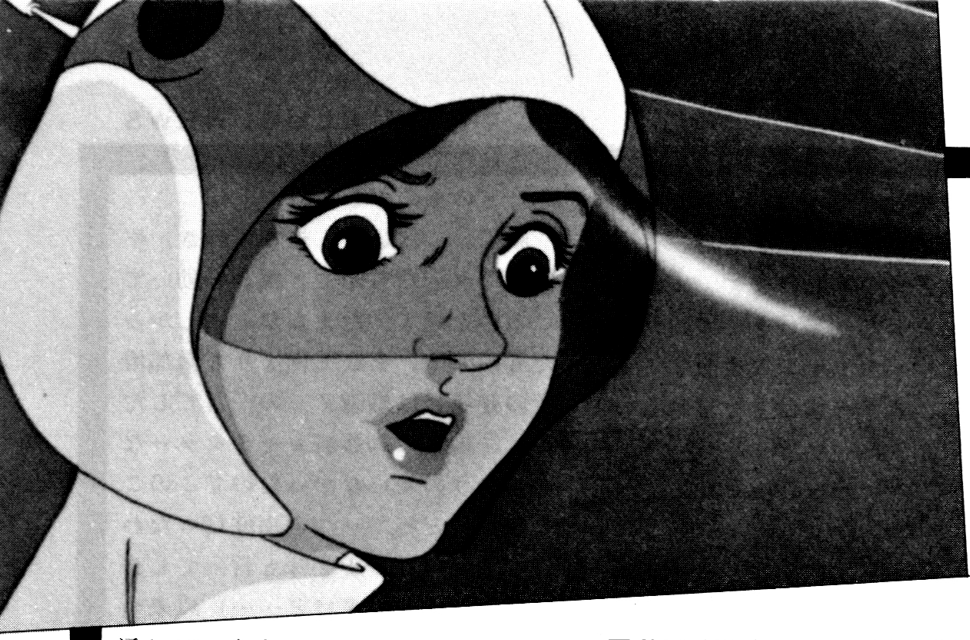
空は高く広い
風はとらわれることがない
雲はゆうゆうと流れつづける
緑の山河はいつもやさしく
青い海はどこまでも深く雄大だ
——そしてそれは
神の手による
偉大な創造物である

BY　G８号　増田浩美

■ガッチャマンに遭遇したのが、今から８年前のこと。第１話を見た時の感動といったら今でも忘れられないほどのものでした。

画面いっぱいに広がる新鮮さ、ギャラクターたちが生き生きと動いているのを見て、たまらなく嬉しかったものです。そして何よりも南部博士の登場には感激！　の一言でしたねエ。過去に御贔屓キャラクターなんていうのがいなかったのでこのことは私にとって一つの事件だったわけです。(おじさま趣味と言ってしまえばそれまでですけど……）以来つい博士を贔屓目に見てしまいますが、忍者隊の５人、ベルク・カッツェに総裁Ｘ様、ギャラクターの隊員に鉄獣メカ、三日月基地やＩＳＯビル……etc. みーんな大好きでした。嫌いなものなんてないくらいといっても過言ではないでしょう。１話１話のドラマのすばらしさといったら言葉ではうまくいえないほどでしたね。博士が猿にされた時は……あのっ、笑ってごまかすっきゃありませんねえ。三日月基地の最期には座蒲団かかえながら涙流して見ていました。なんといっても人間と人間とのドラマが実にリアルに描かれていたことには、本当に拍手を送りたいほどでした。

惜しくもこの作品は足かけ３年で終了。４年後にはIIがスタート。驚きの一言。IIが終わるとＦとしてまた登場……。そして南部長官の死…と続いていきます。南部長官の最期に関しては、とにかく……らしくないという気持ちでいっぱいです。いつどんな危機に会っても必ず人命を先に考え人命にかえられるのならたとえそれがどんなに大切なものであれ、捨てて「今は戦うために生きのびるのだ！」と言っていた南部博士が何故自ら命を落とす行動をとったのか、理解に苦しみました。私としては、たとえ、我が子のように育ててきた５人を殺すはめとなっても、その最期を見届けるべきではなかったのだろうか。長官という立場に着いてから、ずいぶんと人が変ったようで私たちの間では、ずっと博士で



通しています。

しかし長官になった人は代々お亡くなりになって、以来ＩＳＯでは長官になると死ぬこと間違いなしといわれ現在空位とか……。(ジョークです)

10月10日には告別式を開いて下さって竜の子ＦＣをはじめ、スタッフの皆様には感謝の気持ちでいっぱいです。きっと南部長官も安らかに眠れることでしょう。

ＢＹ　南部博士ＦＣ　田部井恵美子

■私は健の大ファンです。健は私の理想の人、そのものなんです。人から見ればおかしいかもしれないけど、私は、どのキャラクターよりも健を愛しているんです。

その健が死にそうな危機におちいってからというもの、私は毎週毎週ガッチャマンＦを見るのが気が気ではありませんでした。そしてトーゼン最終回前の一週間というものガッチャマンのことを思い出しては「健が死んだらどうしよう……」と言っていました。そして最終回、私は「健が死にませんように……」と願いながら見てました。

でも・総裁Ｚを倒してから、健が倒れ、ガックリと力を失った時、もうだめか……と思う反面、いや健は絶対に死なない……という気持ちが、私の心で入り乱れました。そして南部長官のかたみが光りだし健が光に気づいた時、私は嬉しさでいっぱいでした。でも本当に生きているのでしょうか？　どうして最後にもう一度姿を見せてくれなかったのですか？何か不安でたまりません。でも健は生きてますよね！　死んでませんよね！　私は信じてます。また健が元気な姿で私の前に現われてくれることを——。ガッチャマンよ、永遠なれ！

ＢＹ　大阪　健の妻

■ガッチャマンは時間を感じさせない話だったと思います。何か一生懸命やってる時なんか、時間はさっさと過ぎてしまう。映画やTVも夢中になって見てるとすぐ終わってしまう。たとえば「巨人の星」や「ドカベン」等は一試合、一打席、一投に30分かけてくりひろげられることがありますが、見てる方では“ぐぐっ”と魅かれて3分しか見なかった様に感じることがあります。でも、私は少くともガッチャマンを見てる時は30分どころか、3時間も見ていた気分になることがあります。別に仕方なく見ていたとか、そういうのではありません。むしろ、画面に釘づけでした。ガッチャマンでは一話が一打席で終わるなどということはなく、パッパッと場面が転換し、多くの時間が流れ多くの人々が出てきました。そしてそのたくさんの人々の感情が複雑にからみ合っていくつかの不条理、不都合を生み出し考えると頭痛のする様な、考えたくない矛盾を感触させられました。けれどそういった矛盾が私をより一層ガッチャマンにかかわらせたのだと思います。親しい存在とも、理想的な矛盾ともいった感動で。

最終回のクライマックスで、私は涙を流すことや息をつくこと等忘れさせられ、金縛りにあった様に画面に魅かれていました。無情に流れていく時間——間違いなくやってくるジョーの死と地球の滅亡——と、忍者隊とギャラクター、カッツェの、Xの様々な考え、それらが、ただ見ることしかできなかった私の感動をひきずり出していった長い——30分でした。

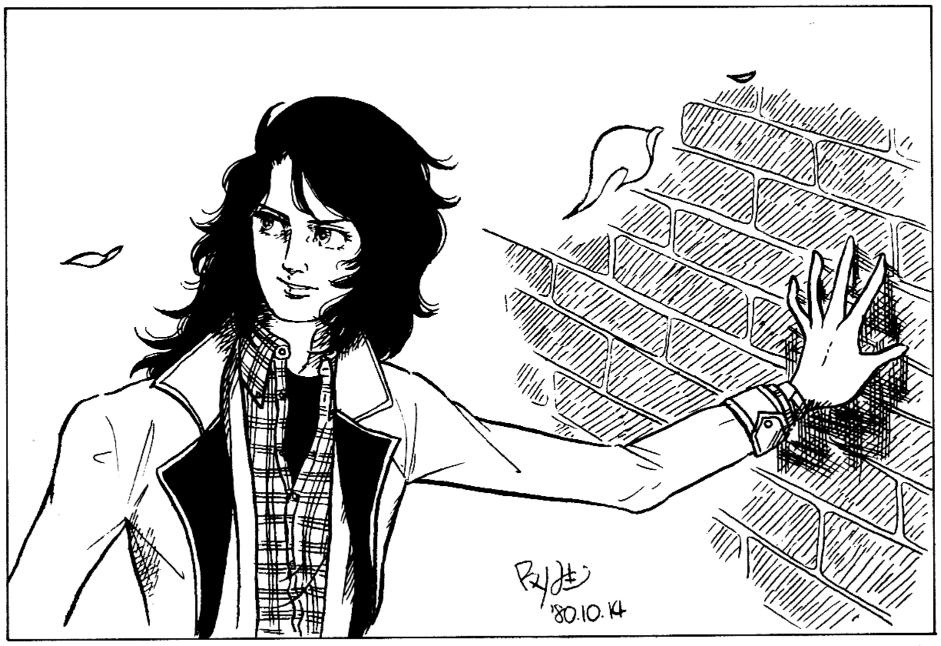
BY　D10016　片野みどり

■ガッチャマンが終わって思うこと。健の笑顔……戦っている時以外の健は優しくて、いつも笑顔のような気がします……それが私の胸にうかんではせつなくしめつけるのです。泣くことないのに、泣かなければならない理由はどこにもないのに、何故か泣けてきたりして……。私が一番恐れていたことはおこらなかったのだから。5人はいつでも一緒なのだから。そうです。私が恐れていたのは、5人のうち1人でも欠けること。5人が離れ離れにされること。でもそうはならなかったでしょう？　5人は、一緒でしょ？　火の鳥は5人一緒になって生まれてくるものですものね。

友だちが「またじきに再放送するんじゃない？」なんて言いました。でもできるなら、再放送はしないでほしい。少なくとも今年中は、いいえあと2～3年は！　私には見られません。見る勇気はありません。たとえパートⅠのまだ都合よく勝っていた頃の科学忍者隊であっても、戦う彼らを見る勇気はありません。それはおしまいにはあんなに傷だらけに、あんなにボロボロになっていくのを見たから。4年もの間、戦ってきたのです。もしかしたら、もっとかも……。ジョーが行方(ゆくえ)をくらましていた間だって、戦い以上につらい思いをしていたにちがいないもの。せめて4年、いえ2年でもいい、彼らをそっとしておいてほしい。もうたくさんです。充分戦ったんです。

GMⅡの頃から、新作を否定する声は多くあったし、確かにGMⅡ、GMFはパートⅠに比べて質の低下があったかもしれません。でも私は今、GMⅡもGMFもあってよかったと思っています。私はGMⅡでジョーの本当の優しさや、GMFで健の本当の強さや、色々なことを知りました。ジュンのすばらしさも、甚平や竜に、親しみも増したし、美しいパンドラ博士や、なんといっても魅力あふれるエゴボスラーに会えたし……。GMFでは生きることの意味を、健の姿から学びました。きっといくつになっても、私はこのガッチャマンのことを忘れません。これからも供に彼らと歩んでいきたい。

BY　静岡のGMファンより



▲G6号　ペンギンのみき

長い間、GMを応援して下さり、ありがとうございます。本放送は終了しましたが、また誌面や、上映会等でお目見えしたいと思います。

ただ今、編集部では皆さんからのお便りを大募集しております。ここのところ常連の方が多くなっておりますので、まだ一度もお出しになってない方、ぜひ御寄稿下さい。イラスト、ポエム、アニメ論、番組の感想、身近な出来事など、何でもいいんです。お待ちしております。採用の方には記念品を差し上げます。

TATSUNOKO FAN CLUB NEWS DECEMBER 20,1980/VOL,4 NO.12 published TATSUNOKO FAN CLUB
〒185 22-12 3-CHOME,MINAMI-CHO KOKUBUNJI-CITY TOKYO,JAPAN
AYAKO YOSHIDA publisher/ HIDEO TAKANO manager/ MACHIKO YAMAMOTO editor/
©1980 TATSUNOKO

事務局だより

ポリマー上映会

ポリマー上映会、ただ今前売り券予約受付中です‼ 御覧になりたい話数がありましたら、リクエストして下さいね。また事務局では上映会のお手伝いをして下さる方を募(つの)っております。お時間のある方、ぜひ御連絡下さい。

日時：昭和56年3月29日(日)
　　　AM9：30～PM4：00
会場：東京・水道橋労音会館
内容：ポリマー　7本
　　　旧作ガッチャマン　2本
チケット：前売　会員　700円
　　　　　　　　一般　1,000円

郵便振込、または無記名の小為替にて、会員No.、TEL、会員何名、一般何名参加かを御記入の上、事務局内、ポリマー上映会係まで、御申込下さい。

支部局情報

宮城、新潟、神奈川、愛知支部局で、新局員募集をしております。支部局は皆さんの一番身近な交流会です。ミニ上映会や討論会など、お手伝いして下さる方を求めております。我こそは――！と熱意のある方、ぜひ御連絡下さい。支部局員の方には来年度よりTV用ポスターサービスの特典を予定しております。

竜の子SHOPは！

竜の子SHOPにオタスケマンと、海底大戦争のセルが入荷いたしました。海底大戦争は来年放映終了後に販売開始いたします。通販は次の通りです。

背景付き3枚セット〒共 1,900円
オタスケマン（ゲキガスキー、トミーヤマ）

背景無し3枚セット〒共 1,100円
オタスケマン（上記と同様）
海底大戦争（ソフィア）

◎メインキャラクターのみ指定可能ですが、（ ）中のものは在庫が少量ですので、2セット以上お求めになりませんと、指定できません。また海底大戦争は背景無しのみですので、あらかじめ御了承下さい。

〈SHOP年末年始営業予定〉
12／29(火)まで平常営業
新春は1／4(日)より営業します。

◎OPEN　AM10：00～PM8：00
第1・3土、日祭日休業
第1日曜は特別営業

耳よりなお話

▶海底大戦争がいよいよ新春に放映となります。詳しくは本誌バックナンバーに掲載しておりますので、お読み下さい。また当日、解説者として総指揮、九里一平が出演します‼

▶ポリマーに続きテッカマンのロマンアルバムが徳間書店より発売になりました。懐しい名場面、資料満載！編集にはなんつっても、あのてっか兄が加わっとりますので、ぜひ御一読を――。定価580円。

▶嬉しいニュースを一つ。今は亡き吉田竜夫社長の長女、ボカンシリーズのキャラクターデザイナー、吉田鈴香嬢と同じくキャラデザの福岡元(げん)氏が結婚いたしました。20才と21才という実に若々しく、仲むつまじいお二人。仕事のイキもぴったりで、これからが楽しみなところです。思うは竜夫社長のこと。健在であれば、娘の花嫁姿をどんなにか喜び、見送ったことでしょう。今は多分、天より幸福な二人を見守っていることと思います。かたやくやしがっているのは多少行き遅れの感がある事務局のY嬢。「あ～～ん、早くお嫁に行きたい！」とのたもうております。皆さん、福岡夫妻に励ましのお便りを、誰か、Y嬢に見合い話を――♡

▲披露宴は11／24、東京・日本教育会館で、声優、スタッフ、他関係の方々が参列、盛大に行われました。

カレンダー販売のお知らせ

1981年、タツノコカレンダーができました‼ ガッチャマンをはじめムテキング、オタスケマン、リルビット、貫太くん、テンプルちゃんなど、竜の子ヒーローが勢揃い。表紙は特製セル、カレンダーからはずして額をつけ、壁にかけてもグー♡
通信販売は次の通り承っております。
お値段：一部1,000円（送料無料）
御申込：郵便振込を御利用下さい。
紅三四郎のシール、プレゼント中！